

ある高齢者の愚痴

たなかよしみち
田中嘉理

人生百年時代と世間ではいたる所で連呼されている。それもいつの間にか知らないうちに、である。我々高齢者は知らないうちに人類が経験した事のない未曾有の時代の先頭を走らされていた。

通常先頭を走るのは血気盛んな若者である。それを老い先短い老人を走らせるとは何事だ！と、怒鳴りたくなる。

怒鳴りたいけれど老人には怒鳴る気力もない。なんとも悔しくてならない。知らないうちに先頭に立っていたのでなんの準備もしていない。

二〇一四年に「老後破産」というタイトルのNHKスペシャルで、生活に困窮する高齢者の実態の一部が放送され反響が大きかった。それに続き、高齢者の貧困の実態について新聞や週刊誌も報道した。それらを見聞きしてショックを受けた国民も多かったのではないだろうか。私もその一人だ。

老後と言えば世間ではご隠居さんと呼ばれ、優雅な生活を送っているというイメージがあり、私もそんな生活を送ってみたいと考えていたのだが、一挙に自分の未来が悲惨なものになるかもしれないという恐怖に襲われた。

私はその当時は五十代で高齢者ではなかったのでショックは受けたものの、半分は他人事であった。

私は最近高齢者になった高齢者の新人である。町内会の活動の中でも周りは七十代や八十代ばかりで、年齢を聞かれるたびに、「若いね」という反応が返ってくる。

「あなたは私達の仲間になったのよ」と言われているみたいでうれしくない。

高齢者になったとたんに前述した「老後破産」や介護、痴呆、寝たきり、と言われる悲惨な高齢者の世界に足を踏み入れてしまった、という失望感に襲われた。

人生百年時代という人類未曾有の時代がこれらの諸問題を生み出した元凶ではないだろうか。

「人生百年」と、当たり前のように言われているが、それを認識したのは最近である。みんなもそうだろう。偉そうに言っている政治家だってそうだ。それなのに老後の諸問題は政治の問題ではなく、老後の準備を怠った国民の問題だ、と言わんばかりに他人様の様子を発言している。

こういった老後問題を若いころに予測できていたら、我々高齢者はもう少し準備をして

いたよ、と言いたい。

そもそも、「人生百年時代」を世間が認識したのはいつ頃だろうか？

多くの日本人や日本政府が「人生百年」をはっきりと認識したのはロンドン・ビジネススクール教授のリンダ・グラッドン氏らがライフ・シフトを二〇一六年十一月に発行して大反響を呼び、二〇一七年秋には安倍晋三政権が「人生百年時代構想会議」を設置、グラッドン氏も有識者議員に起用されたところではないだろうか。

それまでも政府は統計などで超長寿社会に変貌してきている様子を小出しにしてきた。それに伴う諸問題がパラパラと報道され、なんとなく老後がやばいかも、ということが分かってきて、目の前にはつきりと突き付けられたのが前述した二〇一六年から二〇一七年にかけてではないだろうか。

つい最近ではないか！それでいて、皆さん！人生百年時代の老後の準備はされているでしょうね、というのは高齢者にとって酷だろう。

二〇一九年の「老後二千万円問題」を覚えていますか。金融庁が提出した金融審査会場ワーキング・グループ報告書の内容が世間を騒がせ、政治家が焦って火消しに動いていましたが、私は確信犯の仕業だと考えている。

「国民の皆さん、年金だけでは生活できませんよ、各々自助努力をしてください。少子高齢化で歳出は増え続け、税収は減り続けるこの時代に国は面倒見切れませんよ。頑張つて老後資金を自分で準備してください」という日本政府から日本国民に対する強いメッセージだと思えた。

その内容は主に年金が収入である高齢者無職世帯の平均的な収入が毎月の支出より五五五二〇円不足し、老後を三十年間とすると合計で約二千万円が不足する、というものである。あくまで平均を想定したもので、それぞれ個人によつて事情は大きく異なり、報告書の中身はあまり意味がない。それよりは国民に危機意識を与えるためのショック療法であったと私は推測している。そうだとしたら成功したのではないだろうか。

国民が生活苦に自己責任をより強く感じてくれるほど政治はやりやすくなる。

高齢者は今更自分ではどうすることもできない。そのうつぶんを国に向けられても借金だらけの財政ではこれ以上何もできないどころか、支援を縮小するしかない。

それなら、若い人はこれから準備する時間があるからいいね、かというところでもない。高齢者のように高度成長やバブルといういい時代にいい思いをすることもなく、失われた三十年という時代を生きてきて、日本の将来に希望を持てず、高齢者がいい目を見たツケを払わされて、老後の心配をしながら貯蓄をし、派手に遊ぶこともなく、地味に過ごしている若者たちを高齢者より幸せと言えるのだろうか。

今の若者は自分の生き方を選択して、決断しなければならない。そんなことはいつの時

代も同じことだと言われるかもしれないが、今の高齢者に比べるとずっと大変だと思う。

今の高齢者は戦中から戦後にかけて時代に翻弄されて生きてきた。その苦労は筆舌に尽くし難い方々が多いだろう。私が言いたいのは生きる苦労のことを言っているのではなく、生き方の選択を強いられる今の若者は大変だと言っているのだ。

今の高齢者は昭和の時代を良くも悪くも集団で駆け抜けてきた。

戦後の復興のため日本人全員がとにかく経済的に豊かになることを目指して働いた。生き方もへつたくれもない、国が、家族が、自分が豊かになることが国民全員の目的として迷うこともなく働いて稼ぐことに専念した。おかげで高度成長を成し遂げ、なお走り続け、バブルを迎え、調子こいていたらバブルがはじけ、息切れして、現状維持がやっとで、失われた三〇年を迎えたのだ。

我々、高齢者は戦後前半の調子がいい時に生きてきた世代なのだ。人生の選択など考えない、勉強していい大学、いい会社に入って、会社のために滅私奉公し、高い給料やボーナスをもらうこと、起業して稼ぐこと、手に職をつけて稼ぐこと、とにかく稼ぐことが大部分の日本人の目的であり、生き方になっていた。

豊かになるために必死で稼ぐことが目的で、目的イコール生き方になっていた。そこには迷いもなく、選択もなかった。

選択がない、というのは楽なのだ。

江戸時代には日本は封建制度の下で士農工商とはっきりと職能が分けられていた。武士の子は武士、町人の子は町人と決められていた。

「自分は農民の子だからどんなに努力しても農民にしかねない。これは生まれながらに決められていたものなので自分の責任ではない、世の中のせいなのだ」と言える。自分の生き方を世の中の責任に転嫁できる。これはつらいかもしれないが楽なのだ。

親兄弟から「お前は努力が足りないから武士になれないのだ」と責められることはない。今の高齢者はこのような世の中の流れに流されてきた傾向がある。私もその一人だ。今になってもっと好きな仕事に就いておけばよかったと後悔することもある。そんな高齢者は多いのではないだろうか。

それでは、今の若者はどうなのだろうか。

バブルがはじけて日本は失われた三〇年の時代を迎え、超強力なエネルギーを持った大きな流れは消滅した。

若者はそんな流れにも乗ることができなくなり、自ずと自分で生き方を模索しなければならなくなった。一部の若者はそんな時代の到来がかえって幸いして、自分の得意なこと、やりたいことを見つけ、目的に猛進して、今までにないような成果をあげた。その典型が大リーガーの大谷翔平である。

大谷は高校時代からマンダラチャート方式で目標達成シート作成していた。その内容はマスコミにも紹介されているが、それには目的に達成するための手段が事細かに書かれている。また、いくつもの目標をそれぞれ何歳までに達成するかまでも計画されている。

野球の天才が大好きな野球をうまくなるためにはっきりした目的、目標をもって最大限の努力をした結果が今の史上トップの大リーガー選手、大谷翔平を生み出したのではないだろうか。

他の分野でも今までの日本では現れなかった傑出した若い才能が生まれている。これは生き方を選択する時代の環境だからこそ生まれてきている部分があるのではないだろうか。一方で選択肢が見つからない若者は集団的生き方が無くなった現代では行き場をなくしているのではないだろうか。

戦後の集団的生き方は日本の貧しさと人口が急激に増える人口ボーナスという要因によって働けば働くほど豊かになるという欲求を満たしたために日本をけん引した。しかし、それらの大きな要因は消滅し、出生率と出生数は八年連続で減少し、二〇二三年の生まれた子供の数も七五万八六三一人と過去最少になった。

未来に希望が持てない。

生きる目的を見いだせない多くの若者は生活するために後ろから押され、いやいや走っている状況だ。

一方、高齢者にしたってそれまでの長い人生の中で選択してきていない。選択する学習もしてきていない。人生百年で予期せぬ余生が面前に現れてもどうしていいか分からない、といった状況だ。

今更そんなことを言っても仕方がない。人生選択の時代を「どう生きるか」、が課題だ。奇しくも「君たちはどう生きるか」というジブリ映画が世界的に大ヒットしている。

「君たちはどう生きるか」はさかのぼれば一九三七年初出版の吉野源三郎による日本小説で、二〇一七年になって羽賀翔一によって漫画化され、二〇一八年三月には累計二〇〇万部を突破する大ベストセラーになった。八〇年以上を経て話題となり、本も映画も大ヒットしたのは時代が作品にマッチした、ということではないだろうか。若者も老人も自分の生き方や人生について真剣に考えよ、という天の声ではないだろうか。

パスカルの「人間は考える葦である」や人生哲学という言葉がかつては聞かれた。しかし、今は全く聞かれない。

人々は周りに流されていくうちにますます人生について考えなくなってきたのではないだろうか。人は学ばなくても生き方を決められるほど賢くない。知識を得て、考えて、経験して、失敗して、それらの行程を繰り返してやっと選択できる。

今になって我々日本人は自分の生き方について考えざるを得なくなったし、考えるべき

なのではないだろうか。

考えると行って、過去を振り返って後悔したり、周りのせいにして愚痴を言ったり、暗くなることではない。

今日より明日の自分が成長すること、幸せになること、周りの人達が幸せになるにはどうすればいいのか、を常に考え、実行し、何度失敗しようが、繰り返し立ち上がり、前に歩み続ける。将来に希望を持ち続けることだ。

外から与えられた生き方ではなく、自分の中でやりたい仕事、なりたい自分を選択し、邁進できる時代、様々な時代を経て、やっとそんな生き方ができる時代になったのかもしれない。

確かに未曾有の時代が到来した。

そんな時代が人類にとって幸か不幸かはまだ分からない。

それなら幸であることを信じて前向きに人生を進んでいくことを選択した方がいいのではないだろうか。

かっこつけて偉そうなことを言ったが、できれば、自分に対してもっと正直で、素直に生きてきたかった、と本音が漏れる。